

知られざるカリブ島嶼国等 — 東カリブにおける JICA 協力と人的交流

殿川 広康

現地概況

執筆者が勤務する国際協力機構（JICA）セントルシア事務所は、小アンティル諸島（西インド諸島の一部）に属するアンティグア・バーブーダ、グレナダ、セントクリストファー・ネイビス、セントビンセント及びグレナディーン諸島（以下「セントビンセント」）、セントルシア、ドミニカ国、バルバドス、トリニダード・トバゴ、南米大陸北部に属するガイアナ、スリナムの合計10か国を管轄している。

これら10か国の面積は、最小のセントクリストファー・ネイビスの260km²（西表島とほぼ同じ）から最大のガイアナの21万5000km²（本州よりやや小

さい）まで、人口は、最小のセントクリストファー・ネイビスの5.3万人から最大のトリニダード・トバゴの139.9万人までと大きさまざままである。オランダから独立したスリナムの公用語はオランダ語、英国から独立したその他9か国の公用語は英語であるが、フランス統治時期を持つ国においてはフランス語系統の現地語も話されている。民族は、アフリカ系が大半を占める国が多いが、トリニダード・トバゴ、ガイアナ、スリナムの3か国ではインド系が首位を占める。

国民総所得（GNI）総額も、トリニダード・トバゴの215.6億米ドルからドミニカ国の5.1億米ドル

表1 各国概要

国名	面積	人口	民族	公用語	GNI	一人当たりGNI	主要産業
アンティグア・バーブーダ	440平方キロメートル（種子島とほぼ同じ）	9.7万人（2020年）	アフリカ系（87.3%）、混血（4.7%）、ヒスパニック系（2.7%）、白人系（1.6%）、その他（3.6%）	英語（公用語）、アンティグア・クレオール語	13億9,500万米ドル（2020年）	14,250米ドル（2020年）	観光業、建設業、軽工業（衣料品、アルコール、家電等）
ガイアナ	21.5万平方キロメートル（本州よりやや小さい）	78.6万人（2020年）	東インド系（39.8%）、アフリカ系（29.3%）、混血（19.9%）、先住民族（10.5%）、その他（0.5%）	英語（公用語）、ガイアナ・クレオール語等	51億9,000万米ドル（2020年）	6,600米ドル（2020年）	農業（砂糖、米、ラム酒）、鉱業（ボーキサイト、金）、漁業（エビ）、テキスタイル、2019年12月から石油生産開始
グレナダ	340平方キロメートル（五島列島の福江島とほぼ同じ）	11.2万人（2019年）	アフリカ系（82.4%）、混血（13.3%）、東インド系（2.2%）、その他（2.2%）	英語（公用語）、グレナダ・クレオール語	11億180万米ドル（2019年）	9,980米ドル（2019年）	観光業、製造業、農業（カカオ、ナツメグ、バナナ、果実）
スリナム	163,820平方キロメートル（日本の約2分の1）	58.6万人（2020年）	ヒンドゥー系（27.4%）、マルーン系（21.7%）、クレオール系（15.7%）、ジャワ系（13.7%）、混血（13.4%）、その他	オランダ語（公用語）、英語、スリナム語等	32億3,238万米ドル（2020年）	5,510米ドル（2020年）	鉱業（金、石油）、農業（米、バナナ）
セントクリストファー・ネイビス	260平方キロメートル（西表島とほぼ同じ）	5.3万人（2020年）	アフリカ系（92.5%）、混血（3.0%）、白人系（2.1%）、東インド系（1.5%）、その他	英語（公用語）	9億2,500万米ドル（2020年）	17,400米ドル（2020年）	観光業、製造業（衣類、履物など）
セントビンセント	390平方キロメートル（五島列島の福江島とほぼ同じ）	11.0万人（2019年）	アフリカ系（72.8%）、混血（20%）、ヨーロッパ系（4%）、カリブ族（3.6%）、東インド系（1.4%）、その他	英語（公用語）、セントビンセント・クレオール語	8億1,879万米ドル（2019年）	7,460米ドル（2019年）	観光業、農業（バナナ産業）
セントルシア	620平方キロメートル（淡路島とほぼ同じ）	18.3万人（2020年）	アフリカ系（85.3%）、混血（10.9%）、東インド系（2.2%）、その他	英語（公用語）、セントルシア・クレオール語	16億1,400万米ドル（2020年）	8,790米ドル（2020年）	観光業、農業（バナナ、ココナッツ等）
ドミニカ国	750平方キロメートル（奄美大島とほぼ同じ）	7.1万人（2018年）	アフリカ系（86.6%）、混血（9.1%）、カリブ族（2.9%）、その他	英語（公用語）、フランス語系パトワ語	5億800万米ドル（2018年）	7,090米ドル（2018年）	農業（バナナ、ココナッツ、柑橘類）、観光業、製造業（石鹸等）
トリニダード・トバゴ	5,130平方キロメートル（千葉県よりやや大きい）	139.9万人（2020年）	インド系（35.4%）、アフリカ系（34.2%）、混血（23%）、その他（7.5%）	英語（公用語）、ヒンディー語、フランス語、スペイン語、トリニダード・クレオール語等	215億6,000万米ドル（2020年）	15,410米ドル（2020年）	エネルギー産業（石油・石油製品、天然ガス、メタノール、アンモニア、尿素）、鉄鋼製品、食料品、セメント
バルバドス	430平方キロメートル（種子島とほぼ同じ）	28.7万人（2020年）	アフリカ系（91%）、混血（3.5%）、白人系（4%）、東インド系（1%）、その他	英語（公用語）	41億8,420万米ドル（2020年）	14,460米ドル（2020年）	観光業、金融業

出所：外務省ホームページより作成

まで大小さまざまであるが、一人当たり GNI は、世界銀行により高所得国に分類されるセントクリストファー・ネービス（1万 7400 米ドル）、トリニダード・トバゴ（1万 5410 米ドル）、バルバドス（1万 4460 米ドル）、アンティグア・バーブーダ（1万 4250 米ドル）から、高中所得国に分類されるガイアナ（6600 米ドル）まで、JICA が協力を実施している開発途上国の中では比較的所得の高い国が多い。主要産業は、ガイアナ、スリナム、トリニダード・トバゴでは石油産業、鉱業、農業などであるが、他 7 か国では観光業が主要産業であり、新型コロナウイルスの感染拡大により経済的に大きな打撃を受けている。

これら 10 か国はいずれもカリコム加盟国であるが、東カリブの 6 か国（アンティグア・バーブーダ、グレナダ、セントクリストファー・ネービス、セントビンセント、セントルシア、ドミニカ国）は東カリブ諸国機構¹の一員であり、共通通貨東カリブドルの使用を含む経済統合を推進する一方で、保健、教育、環境、農業、観光、エネルギーなどの分野で共同歩調をとっている。また、ガイアナ、スリナムは南米諸国連合²の加盟国である。さらに、台湾と外交関係を持つ 14 か国の内、3 か国（セントクリストファー・ネービス、セントビンセント、セントルシア）が当地域にあり、地域として結束して共同歩調をとる一方で国毎の独自性も併せ持つ。

JICA 協力とそれにもなう人的交流

JICA が当地域に拠点を設けたのは、1995 年のセントルシアへの協力隊員派遣がきっかけであるが、それ以前より水産分野の無償資金協力を中心とした協力を我が国は展開している。特に、東カリブの 6 か国においては、棧橋、防波堤、魚市場、漁民施設

等多くの水産関連施設の整備を行っており、国内の主要水産施設のほとんどが我が国協力により建設されたものである。セントビンセントの首都キングストンに建設された魚市場は地元の方々から「リトルトーキョー」と呼ばれて親しまれるなど、水産施設の整備は当地域における我が国の協力の代名詞として認識されている。近年は、水産施設の整備に加えて、我が国の「里海」概念を活用しつつ、漁民と行政による沿岸水産資源の共同管理手法の具体的事例形成を目的とした技術協力プロジェクトを実施中である。

協力隊員派遣については、1995 年のセントルシア派遣を皮切りに、2003 年にセントビンセント、2003 年にドミニカ国、2008 年にガイアナへの派遣を開始し、当地域にはこれまで 398 名の協力隊員が派遣され、環境、水産、教育、保健、社会的弱者支援等の分野で活動してきた（コロナ禍後現在はセントルシアのみ派遣再開中）。また、研修員受入については、環境、防災、農業・水産、観光等幅広い分野で当地域から累計 1635 名の研修員を受け入れている。当地域の人口規模を考慮した協力隊員派遣数、研修員受入数は、JICA が協力している他の国々に比べて相対的に多いといえ、当地域の省庁の方々と話をする「自分の職場に協力隊員がいたことがある」「JICA 研修で日本に行ったことがある」という話を耳にすることが多く、JICA 協力が日本と当地域の相互理解の一翼を担っていることを実感することが多い。

当地域における在留邦人、日本における当地域出身の方々非常に少ない状況においては、前述のとおり JICA 協力が両地域の人的関係深化の機会となっていると思われるが、その中でも JICA の取り組み事例として以下の 3 つを紹介したい。

表 2 東カリブ地域に対する我が国協力実績

国名	無償資金協力 (2019年度迄) (単位:億円)	技術協力 (2019年度迄) (単位:億円)	内、JICA研修員 (2020年度迄) (単位:人)	内、JICA海外協力隊員 (2021年度迄) (単位:人)
アンティグア・バーブーダ	65.57	9.70	131	
ガイアナ	160.01	20.03	222	
グレナダ	63.79	11.94	159	51
スリナム	56.19	7.67	126	
セントクリストファー・ネービス	33.07	5.26	101	
セントビンセント	68.84	18.67	188	51
セントルシア	92.45	37.43	258	257
ドミニカ国	83.61	16.80	158	39
トリニダード・トバゴ	2.35	33.01	176	
バルバドス	1.10	12.98	116	
合計	626.98	173.49	1,635	398

出所:外務省・JICA ホームページより作成

(1) 大学連携ボランティア

セントルシアにおける漁業振興、自然保護活動、環境教育の推進への協力を目的として、北海道大学、東京海洋大学、鹿児島大学とJICAとの連携により2016年2月～2023年7月を協力期間として本プログラムを実施中である(コロナ禍により2020年3月より派遣中断中)。春季及び夏季の長期休暇の時期に各回約10名の学生が3大学から短期隊員として1か月派遣され(累計89名派遣)、3大学の中から派遣された長期隊員の協力の下いくつかのグループに分かれながら、①魚食の普及活動、②漂着海藻の有効利用についての調査、③環境意識改善のためのワークショップ、エコツアーの改善活動等を実施してきた。短期隊員自体は実務経験の少ない学生であり、現地滞在も1か月とごく短期間であるものの、同じ大学から春夏と連続して派遣されることで次のグループへの引き継ぎを国内で行うことができることや、先輩である長期隊員のサポートを受けつつグループで活動することにより、魚食普及のためのレシピ本の開発や魚の標本の製作、カリブ地域で問題になっている漂着海藻を活用した藻塩や凝集剤の作成など、若者らしい柔軟なアイデアと行動力で色々な試みを行った。

また、10名前後の日本人が同時に滞在するメリットを生かして、日本文化紹介イベントなども実施しており、地域の方々との日本理解の一端になっている。他方、経済協力関係者以外の邦人來訪が少ないセントルシアについては、日本国内で関心を寄せる人も相対的に少ない。1か月の派遣期間を終えた短期隊員が日本国内でセントルシアでの体験を発信することにより、日本国内での当地域への関心喚起につながっているのではないかと大いに期待している。残



写真1 大学連携ボランティアと現地の人々(JICA セントルシア事務所提供)

念ながらコロナ禍により2020年3月以降短期隊員の派遣には至っていないため、早期再開が望まれる。

(2) JICAチェア(JICA日本研究講座設立支援事業)

JICAは、「日本研究」の機会を提供する日本留学プログラムに加えて、日本の開発経験を学ぶ機会を国外にも広げるため、開発途上国各国のトップクラスの大学等を対象に、「日本研究」の講座設立支援を行うプログラム「JICAチェア」の実施を世界各国で推進している。その一環として、2022年2月、セントルシアにおいても、同国で総合大学化を目指すサー・アーサー・ルイス・コミュニティ・カレッジ(SALCC)にて、「日本における教育開発と近代化～セントルシアにとっての教訓」と題したオンラインセミナーを実施した。当地域においては、国外の留学先としては西インド諸島大学、あるいは欧米の大学がほとんどであり、ましてや日本研究を専門にしている学者は皆無とあってよい。そのような中で、各所に参加勧奨を行ったものの、実際のところ参加者はいるのだろうかと不安ではあったが、約50名の参加を得ることができた。日本の教育開発の歴史と日本の教育協力に関する講義に対して、「日本が教育の普及により達成したものは?」「西洋の教育との違いは何か?」「技術教育と一般の教育の関係は?」など活発な質問があり、地理的に大きく離れているものの、日本の近代化のカギに対する潜在的な関心を感じる機会となった。4月には日本関連図書と同カレッジに寄贈するとともに、今後も日本の開発経験を伝えるセミナーを実施することを検討している。これらの活動を通じて、まずは日本の開発経験に対する関心を喚起していきながら、将来的には日本への留学生、ひいては日本と当地域との間の架け橋と



写真2 オンラインセミナーの様子(漆畑ひとみ(JICA セントルシア事務所企画調査員)撮影)

なるような日本研究者の誕生につながることを願っている。

(3) カルデサック流域橋梁架け替え計画

セントルシアの首都カストリーズ近郊のカルデサック地区は、カストリーズとヘワノラ国際空港を結ぶ幹線道路に位置するとともに、カストリーズから観光地スフレへの幹線道路にも位置し、交通の要所である。この地域ではハリケーン等による増水時に洪水・冠水による交通遮断が頻発していることから、カルデサック橋を50年に一度の洪水にも耐え得る橋梁に架け替えることにより、幹線道路網の強化を行うべく、現在我が国無償資金協力による架け替え工事を実施中である。この工事の中では、プレストレス・コンクリート、杭基礎、補強土擁壁など、日本では一般的に用いられている工法ではあるものの、当国においては初めてとなる技術や手法が活用されている。これらの技術や日本の建設業者による施工方法について、当国の将来の土木技術者に学んでもらうべく、2022年5月、SALCCの工学系学生20名による建設現場訪問を実施した。当日は、コンサルタントや建設業者の日本人常駐者からの説明や質疑応答を通して、日本の工事で活用されている技術や施工方法について知るだけでなく、当国の発展のために働く日本人の姿が目に焼き付いたのではないだろうか。



写真3 日本人技術者から説明を受けるSALCC学生（漆畑ひとみ（JICA セントルシア事務所企画調査員）撮影）

おわりに

ここまで当地域におけるJICA協力の概要とそれにもなう当地域との人的交流の事例を紹介してきた。コロナ禍以降オンラインの活用により遠隔地であってもより容易に人と人との交流が可能になって

いるとはいえ、経済的にも結びつきが強くない、物理的な人の往来も活発ではない当地域と日本との人的交流については、今後もJICA協力が一定の役割を果たすものと思われる。それぞれのJICA協力の現場で事業目標の達成に向けて尽力する一方で、それらの事業の実施プロセスの中で日本に対する関心、ひいては日本との人的交流の拡大につながるような

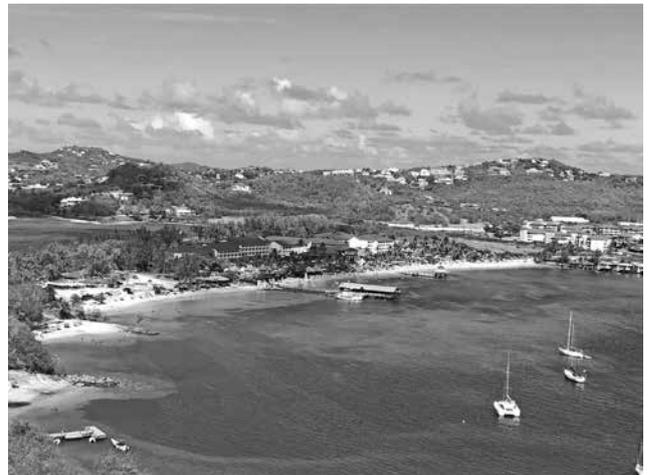


写真4 セントルシアの景勝地ビジョン・アイランドより望む（JICA セントルシア事務所提供）

方策を併せて模索していきたい。

- 1 Organization of Eastern Caribbean States (OECS)。1981年設立。正式加盟国・地域は上記6か国に加えて英領モンセラット。
- 2 Union of South American Nations (UNASUR)。2004年創設の南米共同体が前進で、2007年改称。加盟国はアルゼンチン、ボリビア、ブラジル、チリ、コロンビア、エクアドル、ガイアナ、パラグアイ、ペルー、スリナム、ウルグアイ、ベネズエラ。

（とのかわ ひろやす 国際協力機構（JICA）セントルシア事務所長）